婦人と子ども

第四卷第五號

鬼中佐

やまとの翁

今日は土曜日の夕方で、太郎さんのお家では、今しも、皆で揃って、お夕飯を濟ました所です、いつもの通り、お夕飯後のお話しが始まるといふので、太郎さ

んと、妹の總ちやんとは、もう、さっきから、お父さんの右と左とにちやんと座って待て居ます、お父さんは微笑やかに

父『太郎さん、今日は何のお

話をしようかな』

太『鬼中佐！鬼中佐のお話をして頂戴よ此間討死をした、そら、廣瀬中佐の』

父『ウン、總ちやんは、どうだな』

總『私も　夫が宜いわ、ねー、あんなに豪いんだもの』

父『夫じやあ今晩は中佐の旅順口閉塞の話かな、よし〳〵然し先づ中佐の生ひ立から、だん〳〵順を追って話して行くことにしよう。さあ、太郎さんも　總ちやんも、音なしくして聞くのだよ

太『おっ母さん〳〵早くいらっしやいな、お話が始まりますよ』

總『私呼んで來るは、勝手に居らっしやるのだから』

といって、總子は勝手の方に走って行きました。そして丁度勝手の御用を濟ませたおっ母さんを、後から押し押しして、こゝに這入って來ました。

太『おっ母さん今から鬼中佐のお話をして頂くのよ、おっ母さんも、お聞きなさいな

母『おや〳〵軍神と名のついた、あの廣瀨中佐のお話ですって、それじや、おっ母さんも聞かして戴きませうよ』

と言って總子の側に座はりました。

太『さあ、お父さん、して下さいな』

父『じやあ　始めようかな』

廣瀬中佐の生れたのは、今から丁度三十七年前、即ち明治元年五月二十七日のことで、所は九州豊後の國直入郡竹田村といふ所、中佐の家は、そら、太郎さんも知って居る南朝の菊地氏から出たのだといふことだ。中佐の忠義なのも無理はなからう。

中佐のお父っさんは重武と言ふ人で、御維新の時分いろ〳〵と天子様の爲めに忠義の働きをせられた方なのです。

中佐の家筋は、こう云ふのだが、併し中佐は不幸にもおっ母さんに早く分れて、兄弟五人ながら、皆お祖母さんの手に育ったといふことだ

夫から確か中佐が十歳位の時だ、お父さんは、之迄の手柄に依

て、飛驒の國の高山といふ所へ來て、裁判官をお務めになることになったから　中佐も連れられて來て、此地の小學校に入學することになった。こゝの小學校での成績は、中佐は中々によく出來たが、取り分け運動會には、いつも選手で、其中でも一番相撲が得手だった。柔道の名人になったのも、全く之が爲めだろーよ。

飛驒の小學校を卒業してから、兄さんの勝比古さんといふ方。これは今の大島艦長、海軍中佐になって居られる、この兄さんと一所に東京に出て來て、二三年、或る兵學者の家に寄宿して漢學だの歷史だのを勉强して。夫から海軍豫備校の攻玉社といふ學校を卒業して明治十八年には、とう〳〵築地の海軍兵學校

に入學することになった。

中佐の學校の成績は、何處でゝも學力が優等で、運動には熱心であるし、殊に、自分より目下の生徒には至って優しく交際をし、下の者を苛める無法者や亂暴生徒に對しては、何處までも對抗うて、議論でゝも腕力でゝも、抑へ付けねば承知しないといふ風だから、何時も、校中の人望は、悉く中佐の一身に集まって、あの男こそ、卒業の後は、どんな英雄豪傑になるだらうかとは、誰も〳〵中佐の前途に向っての期望の言葉であったのだ。

夫から、兵學校で勉强すること三年間、明治二十二年四月には、とう〳〵兵學校を卒業して、海軍少尉候補生となり、練習のた

め南洋に向って、遠洋航海と出かけた。多年の宿望漸く成り、茲に始めて同學の士と彼の比叡艦に乘り込んで、見渡す限り極りなき青海原に波を蹴って出た時の、此年少士官の喜びは、まあ、どんなだったと思ふ。まづ太郎さんが、此三月の卒業式に、先生から御褒美を戴いて歸った時位の喜びだったかも知れないな。さて、こゝまでは、ざっと中佐の生徒時代といってよからう。これからが、愈々本舞臺に這入る所だ。

中佐は、かの遠洋航海から歸って、其翌年、遂に海軍少尉となり、軍艦だの、水雷艇だのに乘り込んで、專ら、海軍のことを研究して居ったが、さて、年月はだん〳〵進んで明治二十七年の年を迎へたが、此年から二十八年にかけて、日清戰爭が起った。

此時に中佐は、軍艦扶桑に乗り込んで居たから、次の樣な詩を作った。

生于扶桑、死于扶桑、一死酬國、七生護皇、

どうだ、太郎さん、此詩の意味が分るかな、扶桑といふ日本に生れて來て、扶桑と名のつく軍艦で死ぬのは、面白い、國の恩に報ゆる爲に一度は死ぬるが、七度も生れて來て、天皇陛下に忠義を盡さうといふのだ、どうだ、豪い者だらう。

夫から、間もなく、海軍大尉に昇進して、今度は水雷艇に乗り込んで、威海衛に定遠を打ち沈めた時など、眞先に進んで働いたのだ。

さて、日清戰爭は、見事我國の大勝利となって濟んだのだが、

たゞ殘念で〳〵堪らなかったのは、戰勝の結果として、日本が支那から取った遼東半島を、むざ〳〵露西亞の爲に還附しなければならぬ事になり、折角、取った彼の土地は却って露西亞が占領して仕舞はうといふ形勢になったのだ。これには、日本國民たる者、誰とて、殘念がらぬ者はなかったが其中にも、殊に廣瀨中佐は、『よし〳〵、今に見よ、屹度、敵を打って非道い目に遭はせてやろう』といふので、夫からといふものは其事を一生の目的と定めて仕舞って寢てもさめても露西亞の事ばかり調べて居た。戰爭するには、何んでも、彼國の事を一から十まで、知って置かねばならぬといふ考からだ。こういふ風だから、遂に選拔せられて、明治三十年、露國留學生として、政府から派

遣せられることになったのだが、此時、中佐の喜といったら、もう今にも、目的が達せられたかの樣だった相だ。

さて、露西亞では、彼れこれ五年も居たのだが、其間思ふ存分、彼國のことに付いて調べた。

然し、中佐は學問もよく出來るし、人には親切であるし、おまけに剛勇と來て居るから、露西亞の軍人の間でも、大變に評判がよくって、誰一人中佐を賞めぬ者はなかったといふ事だ。あ、夫から、まだ話してなかったが、中佐は、兵學校に居た時から、嘉納先生の門に入って柔道を稽古して、中々立派な腕前になって居た所からして、露西亞に居る中面白いことが起った。其話はこうだ。或日、露西亞の軍人等が力自慢をやり出して、

『なーに、日本人なんか、第一身體が小さいんだもの、賢いか知らんが、力較べでは、とても吾々に敵うもんか』

といひましたから、負ん氣の中佐は、何で默って居よう。

『こりゃ面白い、夫ではお相手をしよう、さあ、何人でも宜い力の強いと思ふ方は、さあ來た、一度に投げ飛ばすから』

といひさま、庭に飛んで下りると、露西亞の奴等は、なんだ生意氣な、大きなことを言ふ、じやぁ一ひしぎにしてやろうといふので、其中でも力の一番強さうな、大きな男が、三人一度に掛て來た。併し、一方廣瀨中佐は例の講道館柔道の手で以て三人の大男を何の苦もなく、ひねり倒した。さあ、そうなると中佐の強力といふことは露西亞では誰知らぬ者もない位、遂に

は、皇帝の耳にまで這入って、天子の御前で、相撲の試合を御覽に入れることにもなった位だ。

夫から、五年目の末に、

とう〳〵露西亞を出發して歸朝の途に付いたが、露西亞の軍人等は、丸で自分等の兄弟とでも分れる樣に分れを惜んだ相だ。

かくて露西亞の都を出たのが、明治三十五年の一月、彼國の寒氣の嚴しいことといったら、とても、此處では想像が出來ない位、普通なら、船で歸れば、至極安樂なのだが、中佐は、竹があるから、態々、西伯里亞に廻はって、雪や氷の中を、鐵道や橇に乘って、あらゆる困難と寒氣と戰って、遂に其年三月無事歸朝せられた。

中佐は此通り、いろ〳〵な方法で露西亞の事を調べて居たのだが、夫が案外にも早く役立つ事になった。中佐は歸朝してからは、戰鬪艦の朝日に乘り込んで、其水雷長になって居たのだが、其二年目、即ち、本年二月になって、日露の關係遂に破裂し、中佐は、今迄の研究を實地にやることになって、意氣軒昂とし

て佐世保を發したのである。

さあ、夫からは、何時か話した樣に、先づ仁川の勝利となり、旅順口の水雷襲擊となったのだが、露西亞の軍艦どもは、丸で我勢に呑まれて仕舞って、さっぱり旅順口を出ないから、夫ではいっそのこと、港の出口を塞いで仕舞はう、其爲には、大きな古い船を五艘許り其出口へ沈めるのがよからうといふ我が海軍の方の相談になった。

併し、これは、極めて難儀な危い仕事だ。何しろ、敵の砲臺の下まで行って其上敵の軍艦も立て籠って居る、其間際へ行って船を沈め樣といふのだから、非常な勇士でなければ、とても其仕事は出來ないし、又出來た所で生命は、到底助かり樣がない

と見ねばならぬ。そこで、聯合艦隊司令長官東郷中將は、諸艦からして、此決死の任に當るべき勇士七十七人を募った所がどうだ。之に應じて、吾も吾もと願ひ出た勇士の數が都合二千人からあったといふことだ。此中からして、更に七十七人を選り出して、其人數と指揮官とを、五艘の船に乘り込ました、船の名と指揮官とは

天津丸……有馬中佐
報國丸……廣瀨少佐
仁川丸……齊藤大尉
武揚丸……正木大尉
武州丸……島崎中尉

そこで、これ等の船には石炭を一杯積み込んで出たが、之は閉塞本隊で、他に水雷驅逐艦隊は本隊を掩護る役に當り、又此役を濟ました後、船の勇士を載せて歸る爲めに、水雷艇隊が一所に出た。出る前の晩に當って、東郷司令官は、此等の決死隊一同を旗艦に招いて、餞別の酒宴を開かれて、杯を擧げて一同の成功を祝した。そこで、一行の志氣益々奮ひ盟つて事を成就せずんば歸らずといふ意氣込は中々盛なものであった。中佐は此時

報國の操は高し笠置山
朝日に匂ふ敷島の花

といふ歌を咏んで、懷には亡き父君の寫眞と、兼ねて兄とし師

とし親んだ八代大佐の寫眞とを收めた。

かくて、二月二十四日の午前二時といふに、船列整々として旅順に近つけば天寒うして浪荒く、夜は暗うして咫尺も分らず、敵の艦隊は、此前二度の我が襲擊に恐ぢ怖れて、探海燈も點けぬと見にたり。そこで、閉塞本隊は、浪を蹴破り、全速力を以て、港口まで突き進んだ所が、此時敵艦は始めて我が襲擊を覺ったと見にて、俄に探海を以て四方を照らし、本隊目がけて雨霰と大砲をうち出した。其音のすさまじい事といったら、千百の雷が一時に落ちる樣で、今迄の靜かさとは打って變った光景だ。まかり間違ふといふと、五艘の閉塞船は、目的の所まで行かない中に、擊ち沈められんければならぬ所だが、そこは日

本の海軍士官丈けに、甘く潜り抜け〳〵ては乗り切って、港の出口に近づき、めい〳〵此處ぞと思ふ場所に行って碇を下して自分で火藥に火をつけて爆發沈沒した。

此時廣瀨少佐の指揮した報國丸は、旅順口の東口を目がけ、霰の樣な敵の砲丸を物ともしないで、驀地に突進したのだから、敵は、これこそと思ってとりわけ猛烈なる砲擊を加えたのだ。併し少佐を始め、十六勇士はビクともしないで、丸の下で甘く船を沈めて置いて、一同短艇に乗り移ったのであったが少佐は『や、仕舞った、船の中へ短刀を忘れて來た』といって、今や沈みつゝある船へ飛び上って再び彈雨の間をくゞり抜けて、其短刀を取って來た。そして、短艇にはハンカチーフを高く竿の先に

翻へして目標にし、恐れず迫らず漕ぎ返った武者振りには、とて感心しない者はなかったといふ話しだ。

其翌日、露西亞側では、此閉塞船を戰鬪艦だと間違へて日本の戰艦四隻を擊沈したといって、喜んだのは可笑しかったではないか。

か程ひどい、大膽な事をやったのであったが、我が軍の方は報國丸に三人の負傷者があった丈けで、殘らず無事に引き上げたといふのは、全く、天の助けといはねばならぬ。少佐はこの功で、中佐に昇進し、金鵄勳章功四級を授けられた。

然るに、此大計劃によりて勿論、敵の膽をひしいで一縮にさせた事は疑なかったのだが、殘念な事には、港口は全く塞り切ら

んで、まだ少しの明き口があるから、いっそ、も一度やり切らうといふ所から、三月二十七日の夜明け方、更に第二回の閉塞隊を繰り出した。

さて、今回選び出した死士は六十五人、其船名と指揮官との名前は

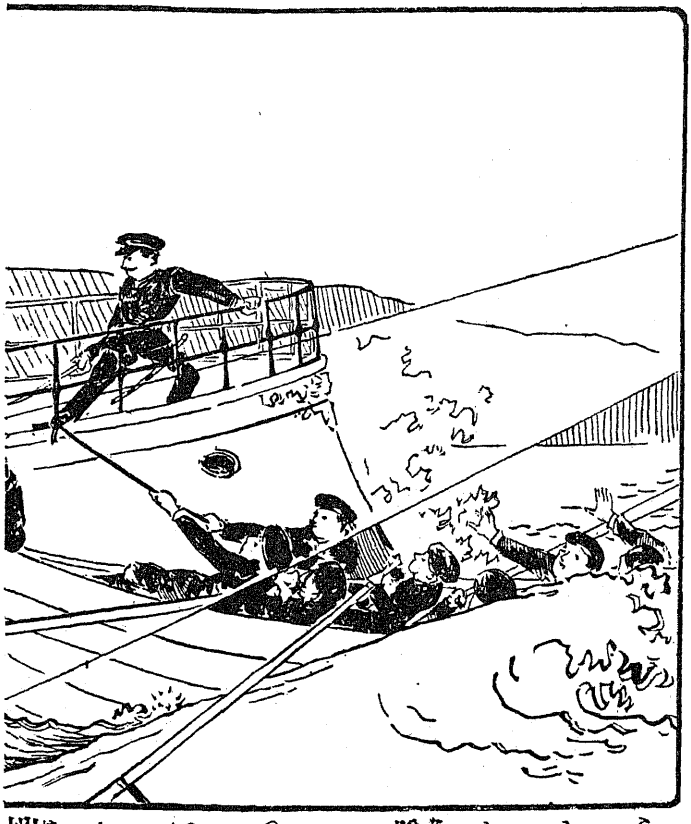
千代丸……有馬中佐
福井丸……廣瀬中佐
米山丸……正木大尉
彌彦丸……森　中尉

かくて、この四隻は、前回の樣に驅逐艦隊と水雷艇隊とに掩護せられ、波を破りて旅順口に進んだが、丁度港口から二哩許り

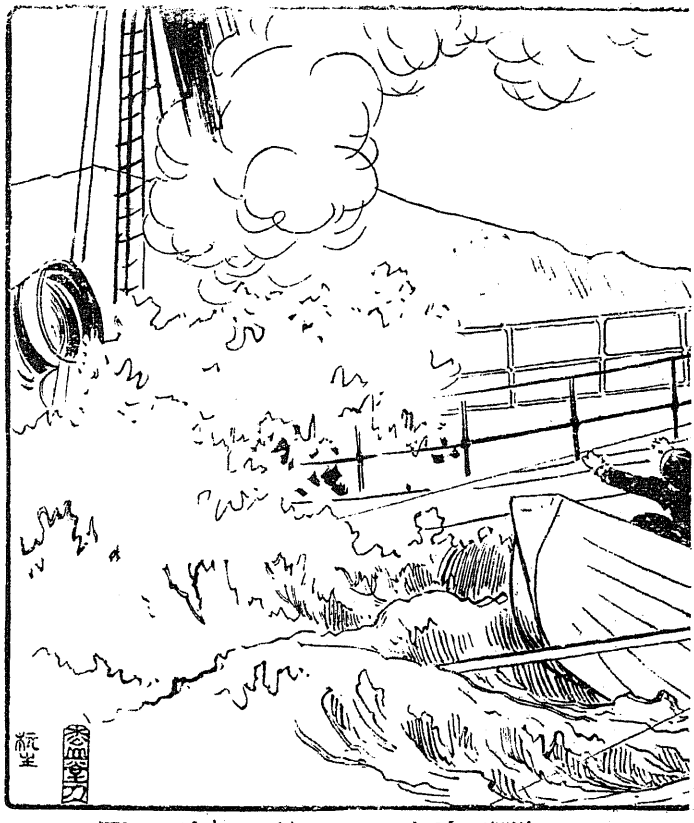
の處で、忽ち敵から發見せられた。『そら、又日本艦隊の襲來だっ』といふので、右と左との砲臺からも、碇泊軍艦からも、うち出したとは〳〵四隻の閉塞船目かけて、こゝを先途と砲擊した。併し我は何れも死を決した勇士だちだから、『なあにこれ位の事何だ』と云ふ勢で、雨と注ぐ彈丸をかいくぐり〳〵進んで行つて、各自思い〳〵の處に船を沈めた。第一番に千代丸は黃金山の近くに沈んだのだ。處で中佐は福井丸を指揮して千代丸の沈みかゝるを側に眺めながらズッと通り拔けて『さあよし』といふので、かね〴〵自分の弟の樣に可愛がって居た部下の杉野兵曹長に『杉野、直火藥に點火するのだ』と命じると剛勇無双の杉野は、一言の下に『畏まりました』と答へて、や

がて、點火の爲めに下に降りて行った所が、此時遲く彼の時早く、敵から發射した魚形水雷は、波を衝いて驀進し來たと見る間に忽ち福井丸に命中したから堪らない、船は忽ち爆發した、中佐は、之を見て『甘く行った、さあ皆、端艇に乘り込んだ乘り込んだ』と指揮して、自分は一番後で乘り移り、いざ引き揚げようとした所が、『これはどうだ、杉野が見えないじやないかどうした』といふ騷ぎ『まさか、戰死じやあるまい』といふので中佐は、又元の船に引き返して、方々尋ねたが、見えないから端艇に來ると矢張居ない。『はて、戰死かな夫では、せめて死骸でも見付けて來よう』といって丁度　三度も引き返し、隅から隅まで探したが　とう〳〵見當らない。其中船は　だん〳〵

沈みかゝる敵からは絶にず大砲が來る、仕方なしに思もひ切って引き揚げることゝした、杉野兵曹長は、全く魚形水雷にかゝった時。勇壯比なき戰死をしたのであったのだ、此時には、もう他の三艘もすっかり沈んで其決死隊も皆夫れ〳〵漕ぎ返って仕舞って、殘るはたゞ福井丸の端艇ばかり



なもんだから、この端艇を目がけて、敵から射撃ち出す大砲小銃は雨霰の樣で忽ち中央に漕いで居た小池機關兵丈んで艇尾に居った筈だのに、暫くして一人の水兵が頭から顔



は飛び來った十二听砲彈の爲めに打ち貫かれて其場に即死した。此時中佐は地圖を手に持ち、栗田大機關士と相

にかけて、一面にサッと潮をあびせかけられたと思って其の拍子にふり向ひて見ると、こは如何に中佐は兩手を垂れて俯くよと見る間もなく忽ち激浪の中に墜落して仕舞った。後には、二錢銅貨程の肉の塊と、血だらけの地圖とが殘って居る許り、前の水兵が潮水を浴びたと思つたのは全く忠勇武烈の中佐が血潮であったのだ。續いて、栗田大機關士、菅沼兵曹も傷いたが、兵曹は、やがて驅逐艦霞に救ひ上げられる時、一聲高く『帝國萬歳』と叫んで息絶えた。

鬼中佐が、壯烈極まりなき最期を遂げた有樣はぎっと、この通りだ。

さて其朝になって何れも『霞』に引き揚げられたが、悲しいでは

ないか、今迄、一同が神とも頼んだ指揮官廣瀬中佐は杉野兵曹長ともに、もはや其姿を止めない。さすがに、覺悟は極めて居たとはいふものゝ、何しろ、軍人の手本といはれた中佐の事だから、中佐の戰死は誰一人惜まぬはなかった。

かくて、中佐の遺骸、といっても一片の肉塊ではあるが……は、うやゝしく東京に捧送され、四月十三日　水交社で、盛なる葬儀を營まれたが、畏くも　陛下よりは　勅使を御差し遣はし下すったといふのは、中佐死後の名譽此上はあるまい。

中佐は、かくて、名譽の戰死を遂げられたが、併し中佐の戰死は、内に在って我國民の元氣を皷舞することはどの位だが知れないと同時に、外に向っては、所謂、日本軍人の大和魂を明に

世界萬國に示したといってよい。これでこそ、一死酬國、七生護皇といふ中佐の志を達したといふべきだ。

さあ、これでお仕舞ひだ、太郎さん　どうだ面白かったか、總ちやんも分ったかね

太『あゝ、面白かった、豪いなあ、廣瀬中佐は

總『まあ、お父さん　中々、お話が甘い事ね

母『太郎さんも、今に大きくなって中佐の樣になるのだらう

（おしまい）